

主体的・対話的で深い学びを実現するために

北海道教育庁学校教育局義務教育課

平成28年10月に札幌市で「独立行政法人教員研修センター 次世代型教育推進センター」が新たな学びに関する教員の資質・能力向上のためのプロジェクトの取組を普及する「平成28年度次世代型教育推進セミナー」を開催し、本道の小・中・高等学校の約100名の先生方が参加しました。

本セミナーの内容をまとめましたので、各学校における校内研修等で御活用ください。

【Q1】 「主体的・対話的で深い学び」を実現するとは、どのようなことですか。

A 1

形式的に対話を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまるのではなく、子どもたちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しを目指すものです。

そのためには、教員相互に、授業改善の視点を共有することが重要であり、中央教育審議会の答申では、次の三つの視点が示されています。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

【Q2】 三つの視点を實現する子どもの姿とは、具体的にどのような姿ですか。

A 2

次世代型教育推進センターでは、三つの視点を實現する子どもの姿を次のように整理しています。

- ① 「主体的な学び」を実現する子どもの姿
 - ・興味・関心を高める
 - ・見通しをもつ
 - ・自分と結び付ける
 - ・振り返って自覚する
- ② 「対話的な学び」を実現する子どもの姿
 - ・多様な情報を収集する
 - ・多様な手段で表現する
 - ・共に課題を解決する
 - ・共に考えを創り上げる
- ③ 「深い学び」を実現する子どもの姿
 - ・課題を発見する
 - ・解決の方向性を見いだす
 - ・思考し解決に向かう
 - ・知識を活用する
 - ・知識を習得する
 - ・知識を構造化する



【Q 3】 「深い学び」に示されている「見方・考え方」とは、どのようなことですか。

A 3

「見方・考え方」とは、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方であり、新しい知識・技能を既に持っている知識・技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものです。

既に身に付けた資質・能力の三つの柱によって支えられた「見方・考え方」が、習得・活用・探究という学びの過程の中で働くことを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりし、それによって「見方・考え方」がさらに豊かになるものになる、という相互の関係にあります。

「見方・考え方」を軸としながら、幅広い授業改善の工夫が展開されることが期待されており、教員には、子どもたちが学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせられるようにすることが求められています。

【Q 4】 「主体的・対話的で深い学び」の実現は、1 単位時間の授業の中で実現すべきですか。

A 4

「主体的・対話的で深い学び」の実現は、1 単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材のまとまりの中で、例えば主体的に学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、子どもが考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で実現されていくこととなります。

【Q 5】 「主体的・対話的で深い学び」と「カリキュラム・マネジメント」は、どのような関係ですか。

A 5

次期学習指導要領が目指すのは、学習の内容と方法の両方を重視し、子どもたちの学びの過程を質的に高めていくことです。単元や題材のまとまりの中で、「子どもたちが何ができるようになるか」を明確にし、「何を学ぶか」という学習内容と、「どのように学ぶか」という学びの過程を「カリキュラム・マネジメント」を通じて、組み立てていくことが重要です。「主体的・対話的で深い学び」と「カリキュラム・マネジメント」は、教育課程を軸としながら、授業、学校の組織や経営の改善などを行うためのものであり、両者は一体として捉えて学校全体の機能を強化する必要があります。

◆ 次世代型教育推進センターの研究の詳細は、次のアドレスで御確認ください ◆
(<http://www.nctd.go.jp/jisedai/index.html>)

平成29年度次世代型教育推進セミナー ～アクティブ・ラーニングについて考える～

北海道教育委員会では、平成29年度も次の日程等で「次世代型教育推進センター」による「次世代型教育推進セミナー」を開催する予定です。

詳細については、後日、お知らせします。

【期日】 平成29年8月29日（火）

【場所】 北海道第二水産ビル

【内容】 新学習指導要領等に関する講義、研修プログラムに関する演習 等



〔Q6〕 「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた校内研修をどのように進めるとよいですか。

A 6

「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善に向けては、教師自身が「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた校内研修を行うことが求められます。

平成28年10月に開催された「次世代型教育推進セミナー」では、子どもの学びの姿をしっかりと捉え、その姿を支える教師の手立てなどを明らかにする方法として、次のような研修を行いました。

1 個人で授業を分析

- 授業参観で気付いたことを付箋紙に記入します。

【記入の観点(例)】

- ・主体的・対話的で深い学びにつながる子どもの姿(黄色の付箋紙)
- ・上記の子どもの学びを支える教師の手立て(赤の付箋紙)

【記入例】

(子どもが)

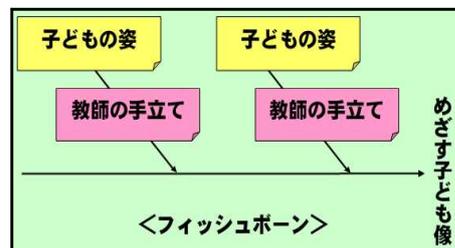
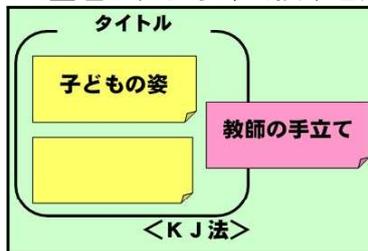
思考ツールを選んで使っている。

(教師が)

目的に応じて、思考ツールを使うことを教えているのだろう。

2 グループで授業を分析

- (1) 付箋紙に記入したことを交流し合い、KJ法やフィッシュボーン法等を用いて整理し、より深く授業を分析します。



- (2) 整理、分析したことをもとに、「主体的・対話的で深い学び」の視点から、授業改善の具体的な方策を考えます。

3 整理、分析の交流

- ギャラリーウォークやポスターセッション等を行い、整理、分析したことをグループ間で交流します。

【交流の観点(例)】

- ・「子どもの姿」や「教師の手立て」のまとめ方の違い
- ・グループ分析のまとめ方の違い
- ・構造化の仕方の違い

4 振り返り

- 校内研修における自分自身の学びを振り返り、気付いたことや今後取り組みたいことを付箋紙に記入したり、話し合ったりします。

【振り返りの観点(例)】

- ・授業の分析を通して、気付いたことや考えたこと
- ・授業改善のために今後取り組みたいこと
- ・授業づくりについての見方や考え方が変容したこと

